

文化

「もういよいよか(たかちか)」と読む。十三代長州藩主である。この名の違いは「慶」が十二代將軍家慶の偏諱だから、幕府への謹慎をすべく返上したからである。

慶親は、そうせい候と擲されることあるが、その理由について私見を述べたい。

十八歳にて襲封した慶

緑地帯

高遠 信次

親は、翌年に村田清風を地江戸両仕組掛に任じ、さらに用談役に任じられた村田は、藩の借銀八万圓を「三十七万圓賦皆済任法」により返済し、

幕末の岩国

③ 毛利慶親敬親

この村田の成功と失脚、ならびに連立政権の挫折が、慶親の脳裏に深く刻み込まれたのではなからうか? 以降、身分の上にかかわらず、慶親は家臣の意見を重用し、一任する。

例を挙げれば、長井雅楽の「航海遠略策」、真木和泉(久留米水天宮の神官の「御親征攘夷」、さらに俗論党や高杉晋作・大村益次郎・桂小五郎らの重用がそれである。

弊履の如く切腹に処せられ、真木は禁門の変にて討ち死にする。自らの方針が振り子のごとく左右にふれ、そのせいで何人死のうが恬淡とした様子なのは器の大きさか、器に水が入っていないからか、とまれ興味のない人物である。

揺らぐことがなかった。慶親は経幹を世子定広の後見人に任じて外交にあたらせただけでなく、上京進発・謝罪恭順・再征抗戦といった重要事項は必ず経幹を呼び寄せ、かつ三支藩主と世子を含めた六人の合議にて決定した。慶親は民主的?な人物だったんだろう。

しかし慶親の岩国藩主(第39回中国短編文学賞 第3席受賞者)広島市吉川経幹への信頼だけは